

KICC の初級日本語クラスの今後に向けて

田中 恵子

1. はじめに

2023 年 10 月より(公財)神戸国際コミュニティセンターの地域日本語教育総括コーディネーターを務めることになり、神戸市における地域日本語教育の一端を担うことになった。本来なら、神戸市の地域日本語教育の実情をしっかりと把握し、業務を進めていかなければならないのだが、全体を見渡す能力も時間的余裕もない。これまでできたと言えるのは、神戸国際コミュニティセンター(以下 KICC)における日本語教育の現状を把握し、問題点を抽出してその改善策を実施することであり、幾分かの成果が見え始めたというところである。本稿では、その経緯を述べ、今後のさらなる改善に向けての考えを述べる。

2. 神戸市の地域日本語教育の現状

2-1. 神戸市の外国人在住者

神戸市には 5 万 9 千人近くの外国人が居住しており、神戸市の人口の 4% 近くを占めている。(2024 年 12 月末現在) 過去 5 年間で約 1 万人の外国人が増加し、今後も増加の一途をたどると見られている。

外国人住民数と国籍別の状況



図-1 神戸市の外国人人口 (出典) 神戸市 HP「人口・人口動態データ集」

神戸市には以前より、韓国・朝鮮、中国から来た人々が多く居住していたが、近年、ベトナム、ネパール、ミャンマーから来日する人々が増えている。韓国・朝鮮、中国から来た住民は特別永住者、永住者が多く、日本語を話せる人の比率はその他の国々に比べると高い。しかし、上記の国々の中でもニューカマーと呼ばれる人々には日本語学習が必要な人々が少なくない。ましてや、他のアジアの

国々から技能実習や特定技能、技術・人文・国際等の在留資格で来ている外国人の多くは日本語が不十分であるにもかかわらず、その学習機会は限られている。勤務時間、職場環境、家庭の事情等で日本語を学習したくてもできない人々が多い。ただ、神戸市に日本語学習を必要としている人々がどの程度存在するかの調査はこれまで行われていないため、正確な人数は把握できていない。

2-2. 神戸市の地域日本語教育の現状

市内にはボランティアによる日本語教室が20以上あり、日本語学習の機会を提供している。ただ、現時点での学習者数は正確に把握できていない。週1回の頻度で通う教室が大多数であり、1回につき1時間から2時間の授業を行っているようである。ボランティアは各種団体が開催する養成講座を受講している人が多く、中には420時間の講座を修了した人、日本語教育能力試験に合格した人、日本語学校等で教えている現職の日本語教師もいる。

以下の表に見るように、市役所のある神戸市の中心の中央区には外国人が最も多く、垂水区の4倍以上が居住している。西区や北区は人口は他より少ないが、近年急速に外国人の数が増えており、地域日本語教室では賄いきれなくなっている。

表-1 神戸市の各区分外国人人口(降順) 2023年12月末(神戸市統計9)

区	中央区	長田区	兵庫区	東灘区	灘区	西区	須磨区	北区	垂水区
外国人人口	14,397	7,946	7,541	7,148	4,709	3,888	3,674	3,060	3,058

3. KICCにおける日本語教育

3-1. ボランティアによる日本語学習支援

KICCでもボランティア(以下「サポーター」という)による日本語教室を開いている。これはKICCが1990年5月にオープンして以来、続いている活動である。当初20名程度であったサポーターが今や登録数約800名に上っているが、実際に稼働しているのは約100名である。年に4回(2月、5月、8月、11月)、60名ずつ学習希望者を募り、サポーターの都合と学習者の都合、学習希望内容を勘案してマッチングを行っている。毎回、学習希望者は多く、このところ、学習申し込み開始日から2、3日で定員に達するという状況になっている。

一つのペアは半年間学習を続けることになっており、さらに継続を希望する場合は、半年後、改めて申し込まなければならない。昨年度は、延べ221ペアの学習が行われた。日本語学習の希望を叶えるためには定員を増やす必要があるが、空間的に限界があるため、早々には実現は難しい。

教室は新長田と三宮の2か所がある。KICCの本部がある新長田では月、水、金、土曜日に、三宮の「三宮にほんごプラザ」では火、木、土曜日に、午前10時から午後8時まで各2時間ずつの教室が開かれている。会話の練習を中心に行っているペアや日本語能力試験合格を目指して勉強

しているペアが多く、入門レベルの日本語を学習している場合は非常に稀だと言える。

申し込みが多いとはいえ、6 か月続かない学習者、途中で無断欠席する学習者が少なくない。マッチングがうまくいかなかった場合もあるが、安易に申し込みだけしてそれほど学習意欲がないという場合もある。

3-2. KICC の登録日本語講師による日本語教室

令和元年度(2019年)より、文科省の「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」の一環としてKICCに登録している日本語教師が教える初級日本語教室が設けられた。登録日本語講師は、大学で日本語教育を専攻、420時間の養成講座修了、日本語教育能力検定試験合格のいずれかを満たすと同時に、日本語教師経験が2年以上あることを条件にしている。KICCは日本語学校ではないため、非常勤講師として採用するのではなく、委嘱の形をとっている。

初年度の教室は、三宮のみで昼間開かれ、4クラス計24名の登録者であったが、翌年には夜間のクラス及びオンラインクラスが設けられ、年間23クラス、登録者は191人に急増した。その後、三宮に加えて新長田、御影でも開設され、2021年より年間5クールが2年間続き、全クラス数は2021年66、2022年87にのぼり、登録者数も各年度529人、831人に達した。昨年度(2023年)は出だしが1か月遅れたこともあり、やや減少し、67クラス539人であった。今年度は60クラス551人となっている。

表-2 2019年～2024年 クラス数と登録者数

年度	2019	2020	2021	2022	2023	2024
クラス数	4	23	66	87	67	60
登録者数(人)	24	191	529	831	539	551

4. 初級日本語クラスの昨年度までの経緯と問題点

4-1. 受講生の継続率の低さ

受講生の継続率(コース全体を通しての出席率というより、コースの最後まで受講を続けた受講生の率)が低いということが最も大きな問題であった。申し込みだけして出席しなかったり、数回出席して来なくなってしまったりする受講生が少なくなかった。それほど学習意欲がないのに軽い気持ちで申し込み、都合がいいときだけ出席すればいいと思っている受講生もいた。原因としては以下のようなことが挙げられる。

4-2. 受講生の日本語力とクラスレベルのミスマッチ

まず、受講生の日本語力とクラスでの授業内容のレベルがそぐわなかった。この事態を生み出したのは、一つには受講生の日本語力を何らチェックすることなく、本人の希望のみでクラスを決定していたということがある。クラスは入門、初級1、初級2の3レベルに分かれていたのだが、受講生が自分の日本語をしっかり自覚できているとは限らないので、入門が終わるか終わらないかの程度で

あるにも関わらず、初級2のクラスに入っていたりすることは珍しくなかった。また、自らの日本語力に合わないとわかっていても、自分にとって都合のいい時間帯のクラスを選んでいた受講生も多かった。結果的に、受講生間のレベル差が大きいクラスができてしまい、教師が授業を進めるのに苦勞するだけでなく、受講生の日本語習得も思うようにいかなかった。

4-3. 無理のあるカリキュラムと指導方法

カリキュラムの問題も大きい。使用教材『いろどり』（国際交流基金）に合わせて1クールの時間数が少なく、教材が要求している授業内容を消化できていなかった。また、聴解、読み書きを軽視し、やりとりに重点をおいた授業展開となっていた。極端な場合、ひらがな、カタカナの読み書きができなくてもいいというような指導がなされていたので、初級2のレベルでもひらがなが読めない受講生がいた。そのため、各レベルで習得すべき内容（特に、語彙、読み書き）を身につけないまま次のレベルに進むということが多々あった。

4-4. 教材の扱いの不統一

KICCの登録日本語講師は36名である。（2025年1月現在）初級日本語クラス開設時の教師から、2024年度に初めて委嘱した教師まで、KICCでの日本語教育経験に長短はあるが、既に、日本語学校や大学で教師経験を積んでいる。したがって、様々なレベルの学習者、教材に対応できる教師である。

総括コーディネーターの職に就いてまもなく、各講師の授業見学を実施した。2023年末から2024年初めにかけて、地域日本語教育コーディネーターと分担して行った。そこで気づいたのは、講師によって教材の扱いが実にさまざまであるということだった。もちろん、講師の個性、講師の理想とする授業を否定するものではない。しかし、教材『いろどり』が最も大切にしている、「まずは、聞くこと。聞くことで語彙、表現を身につけ、その後でそれを使って会話をする」という基本的な流れに沿わない授業を行っている講師が少なくなかった。付属の音声をよく聞きもしないで、とりあえず会話をさせるという姿勢は問題だと感じた。

そこで、教材『いろどり』のを作成した国際交流基金に講師をお願いし、オンラインによる、教材『いろどり』の使い方についての研修会を行った。（2024年2月）そして、『いろどり』の製作意図、あるべき授業の進め方について説明していただいた。聴解の大切さ、文法規則はまず学習者に気づかせること、教材を勝手に改変しないこと（「魔改造」）などを分かりやすく話していただき、登録講師に教材の進め方についての共通認識を持ってもらうことができた。

4-5. 出席することの軽視

次に、出席状況を特に問わないでいたということがある。登録のみ行い、授業には出て来ない人、出てきても数回で来なくなってしまう人が珍しくなかったにもかかわらず、それをいわば放置していた。これは、申し込み人数が増えればよしとする傾向があったためだと言える。無料の教室であるため、気軽にやめることができたということもある。2023年7月以前はしっかりと統計が取れていないので

数字で示すことはできないが、昨年 8 月以降の出席の状況は50%~60%である。

表-3 昨年度のクール別出席率

クール	8 月	10月	12 月	1 月
出席率	55.6	51.6	58.2	52.6

5. 今年度からの基本方針と新たな取り組み

5-1. 基本方針

昨年度までの問題点を踏まえ、受講者の登録者数（以前は1回でも参加すれば数に入れていた）を増やすことより、クラスの最後まで継続して受講し、確実に日本語力を身につけた受講生を増やすことを目指す。言い換えれば、「量より質」を目指すということである。

5-2. 新たな取り組み

(1) レベルチェックインタビューの実施

申し込んだ学習者対象（入門クラスを除く）にレベルチェックインタビューを実施した。これまでは、学習者間に日本語力のレベル差が存在するクラスが多く、期待された学習成果を上げることが難しいだけでなく、授業遂行上も問題があった。前述したように、はなはだしい場合は、実際は入門レベルなのに、初級 2 のクラスで学習しているような例もあったからである。

(2) 修了証書の授与

出席率70%以上の受講生に修了証書を授与することにした。「時間があるとき」「気が向いたとき」に出席するのでもかまわないという意識が受講生にも教師にもあった。そういう受講生が欠員枠を占めることで、学習意欲の高い学習希望者が受講登録できないということは避けたい、できるだけ授業を継続して受講し、学習事項を身につけてほしいという考えから導入した。

(3) 教材の配布

教材『いろどり』をプリントアウトしたもの（2~4 課毎に綴じて冊子にしたもの）を受講生に配布した。これまでは教材の印刷は受講生任せて、こちらから配布することはなかった。実際には自分でプリントアウトする受講生は稀であり、ほとんどはテキストのない状態で学習していた。授業中だけでなく、授業前に学習内容をあらかじめ見ておくためにも、授業後、学習したことを確認、復習するためにも、紙媒体の教材が手元にあったほうが学習効果が上がるのは当然である。なお、オンラインクラスの受講生は、事務局のある新長田まで取りに来れば渡している。

(4) カリキュラム等の変更

まず、1 クールの授業時間数を増やし、カリキュラムを改変した。昨年度までは教材『いろどり』の各レベル（入門、初級1、初級2）を全 23 回 46 時間で学習していたが、今年度より時間数を 1.5

倍に増やし、各レベルを全 36 回 72 時間で終えることとした。『いろいろ』を作成した国際交流基金の説明では言語知識を扱う場合は、各レベル修了には 80～100 時間かかることとされているので、これでも十分とは言えない。

前年度までの時間数では、教材の内容を半分か 3 分の 2 程度しか授業で扱えないという現実があった。つまり教材の内容を十分に学習していないのに、次のレベルに進めるといふびつな現象が生じていたのである。

次に、読み書きもある程度できるようにすることを目指すことにした。「会話さえできればいい」という姿勢ではなく、簡単な読み書きはできるようにするため、受講前にはひらがな、カタカナを習得しておくこと（特に読めること）を求めた。仮名が読めれば、「やさしいにほんご」で書かれたお知らせ等を読むことができ、漢字学習につなげることも容易になるためである。また、文科省が生活者の日本語のレベルとして求めている、上のレベル（B1）を目指すなら、読み書きは必須である。

6. 初級日本語クラスの今年度の出席率の状況

初級日本語クラスには新長田、御影に読み書きクラスも開講されているが、他のクラスとはカリキュラムが異なるため、以下の記述、図表には含まれていない。

6-1. 4 月クラスの状況

学習希望者が多く、特に、三宮クラスは募集開始 1 週間で締め切った。また、入門、初級 1 の受講希望者が多かったため、急遽、三宮とオンラインでクラスを増設した。なお、今後の図表には新長田、御影で開講した読み書きクラスは含んでいない。読み書きクラスはカリキュラムが異なるため、比較の対象とならないためである。

当初の開講予定クラス数：14（三宮 4 クラス、オンライン5クラス、新長田4クラス、御影1クラス）

実際の開講クラス数：18（増設 三宮 3 クラス、オンライン1クラス）

表-4 4 月クラスの拠点別統計

対面	申し込み人数	クラス数	クラス定員
三宮	70	7	15
新長田	40	4	10
御影	5	1	7
オンライン	55	6	10
合計	170	18	

2023 年度 8 月クラスは今年度上半期の 4 月クラスと受講生総数が近いいため出席率を比較したのが以下のグラフである。

① 三宮・オンラインクラスの出席率の比較

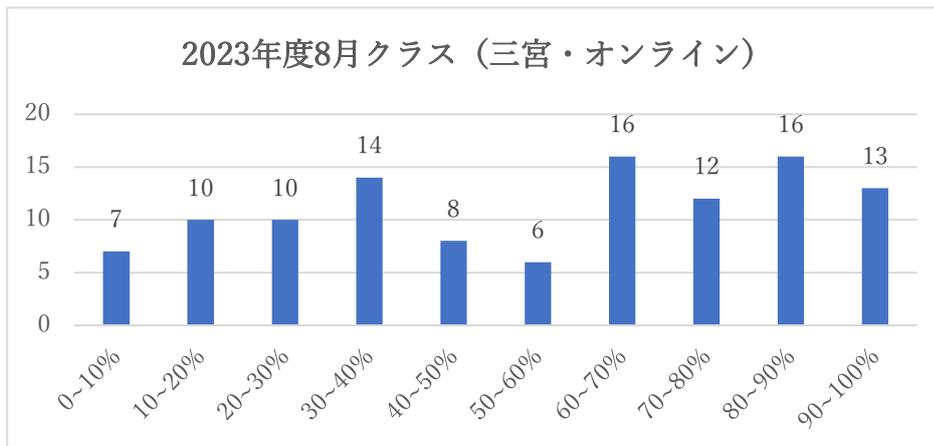


図-2 2023年8月 三宮・オンラインクラスの出席率

全受講生 112名 出席率 70%以上 41名 (全体の 36.6%) 80%以上 29名 (25.9%)

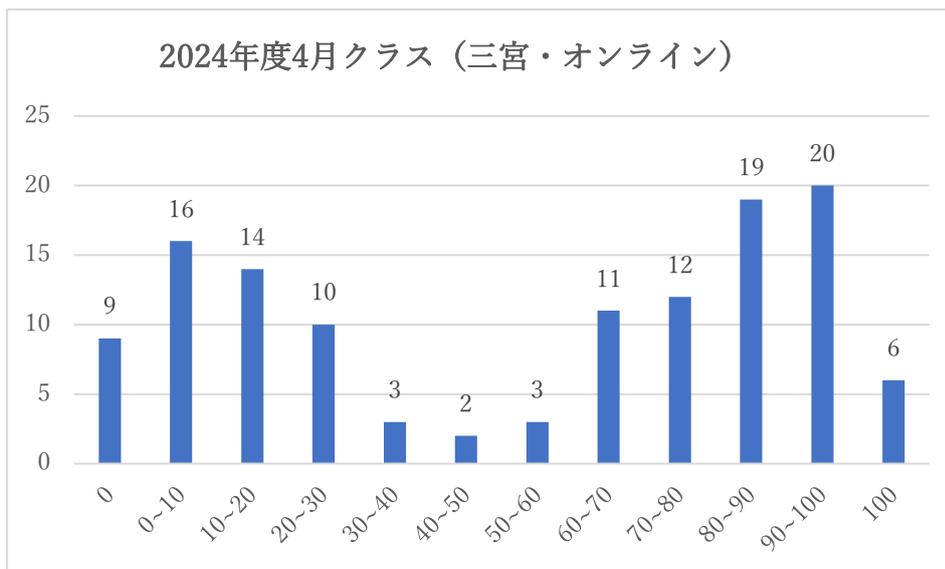


図-3 2024年4月 三宮・オンラインクラスの出席率

全受講生 125名 出席率 70%以上 57名 (全体の 45.6%) 80%以上 45名 (36%)

②新長田・御影クラスの比較

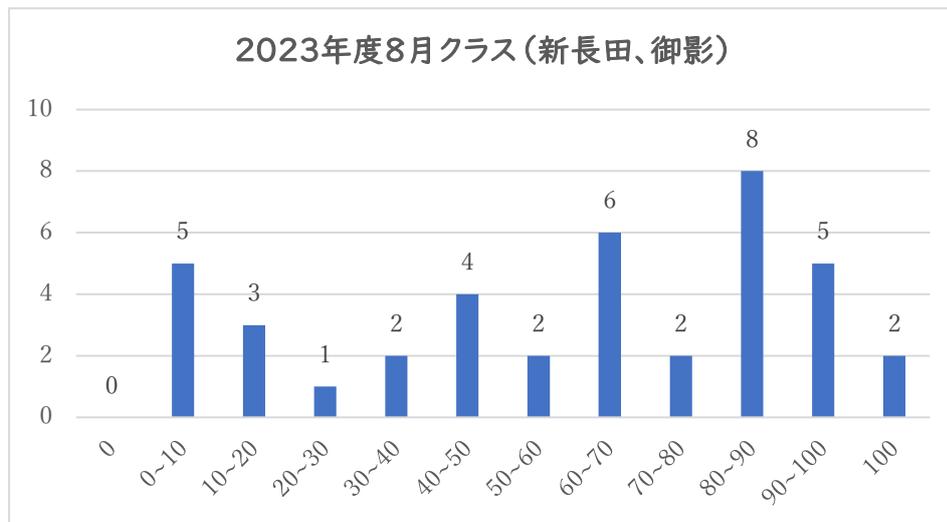


図-4 2023年8月 新長田・御影クラスの出席率

全受講生 40名 出席率70%以上 17名(全体の42.5%)

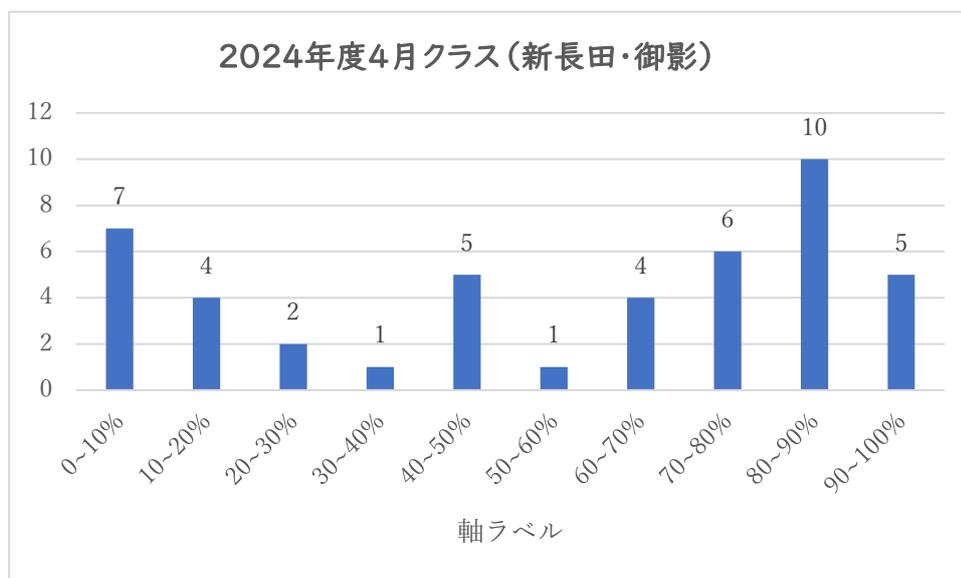


図-5 2024年4月 新長田・御影クラスの出席率

全受講生 45名 出席率70%以上 20名(全体の44.4%)

新長田、御影のクラスでは昨年度の8月クラスと今年度の4月クラスを比較すると、出席率70%以上の受講生が2%程度増えたにとどまったが、三宮、オンラインでは今年度の4月クラスは10%近く増加した。つまり、最後まで継続して学習する受講生が増加したということである。以前は、気が向いたときだけ来たり、無料だから行ってみようかと考えたりする受講生が少なくなかった。今年度は、できるだけ都合をつけて出席しようとする受講生、言い換えれば、本気で学ぼうとする受講生が増え

たと言える。

6-2. 8月クラスの状況

週2回の授業を実施している新長田と御影は授業が8月15日まで続いたため、次のクールは10月開始としていた。したがって、8月クラスは三宮とオンラインを開講した。

表-5 2024年度 8月開講クラスの状況

	開講クラス数	申込者数	出席率 70%以上
三宮	8クラス	87名	45名(51.7%)
オンライン	7クラス	58名	24名(41.4%)
合計	15クラス	145名	69名(47.6%)

三宮クラスは出席率70%以上の受講生が半数を超え、4月クラスと比較しても約5%上昇している。ただ、オンラインは三宮より10%余り、出席率70%を超える受講生が少ない。対面よりオンラインの出席率が芳しくないのは恒常的なものであるとはいえ、対策を考える必要がある。

6-3. 10月クラス、12月クラスの途中経過

10月クラスは新長田と御影で、12月クラスは三宮とオンラインで開講した。申込者数は以下のようなものである。修了するのは10月クラスが2月25日、12月クラスは3月19日であるため、出席率の算定はできないが、これまでのところ4月、8月クラスより好調な出席状況だと言える。

表-6 10月、12月クラスの状況

クール	拠点	開講クラス数	申込者数
10月	新長田	4	38
	御影	2	14
	合計	6	52
12月	三宮	8	90
	オンライン	7	60
	合計	15	150

7. 今年後の変更点の実施状況と成果

前章では出席率を中心に昨年8月クラスとの比較を含めて今年度の出席率の状況を見てきたが、ここでは4章で挙げた今年度の変更点の実施状況とその成果を述べていく。

7-1. 変更点の実施状況

(1) レベルチェックインタビュー

クールを追うごとにインタビューを受ける参加者が増加している。インタビューを初めて実施した4月クラスは、申込時にインタビューが必須であること、インタビューの希望日時を記入することを要求

したのだが、希望日時を書かずに申し込む人が少なくなかった。8月クラスでは4月から継続する受講生も多かったのも、いくらか周知の度合いが高まった。そして、10月クラス、12月クラスになると、受講するためには、インタビューを受けることが必須であるという意識が明確になり、9割以上の受講希望者がインタビューを受けた。こうして、「なんとなく申し込んだだけ」という申込者が減少してきたと思われる。それが、出席率の上昇につながっていると言える。

表-7 インタビューの実施状況(2024年度)

	申込人数	インタビュー必要数	インタビュー受けた人数	インタビューを受けた人の割合
4月クラス	170	95	54	56.8
8月クラス	145	91	57	62.6
10月クラス	52	32	29	90.6
12月クラス	150	89	81	91

入門クラス以外の申込者全員がインタビューを受けることを目指しているが、遂行は容易なことではない。12月クラスではインタビューの日時を2回変更したうえ、2回目も連絡なしに現れなかったため、授業初日に授業に参加しようとした受講生をつかまえて実施した例がある。結局、日本語力が希望レベルには達していなかったため、下のレベルでの受講は望まず、辞退ということになった。このように、インタビューを避ける受講生への対処は難しい。

また、特に受講生の多い4月クラスは、100人程度の希望者に対して短期間でインタビューをしなければならず、インタビューそのものはもちろん、日時の設定が複雑なだけでなく、キャンセルも少なくないため、かなり煩瑣な作業に時間がとられる。ただ、継続して学習する受講生を増やすためには、ある程度致し方ないことだとも言える。

(2) 修了証書の授与

対面クラスは授業最終日に授与し、オンラインクラスはPDFで送ったうえ、証書本体がほしければKICCの事務所まで取りに来てもらうことにしている。受講生には非常に好評で、証書もらうことで自らの頑張りが証明されたようでもあり、一つの段階を終えたというはっきりした区切りにもなると感じているようだ。ただ、どうしても仕事の都合や家庭の事情で出席が70%に達せず悔しい思いをする受講生も少なからず存在する。そこで、修了証書もらってなくても(出席率が70%を切っても)インタビューの結果、希望レベルの日本語力に達していると判断した場合は次のクラスを受講できることにしている。

実際には(特にオンラインの授業では)、授業報告を見ると、かなりの遅刻、欠席であっても出席として記録されている場合もある。地域日本語教室では致し方ないと思えるべきかもしれない。

36回の授業を欠かさず出席した受講生が4月クラスは6名、8月クラスは13名いた。それぞれ事情があるにもかかわらず、毎回休まず出席するというのはたやすいことではない。修了証書とは別に「皆勤賞」を設けてはどうかという意見も出ている。

(3)教材の配布

対面クラスは授業中に配布し、オンラインクラスも KICC まで取りに来る受講生が増加しつつある。持っていなかった受講生も同じクラスの人たちが持っているのを見て、KICC まで足を運ぶようである。(オンラインの受講生への配布 4月クラス 16人/55人 8月クラス 31人/58人)

受講生には「授業で何をやっているかはっきりわかる」「家でも予習、復習がしやすい」と好評である。講師の先生方も、文字の定着に有効であるのはもちろん、授業が格段にやりやすくなったという声があがっている。

(4)カリキュラム等の変更

授業はほぼ変更したカリキュラム通りに進められている。教材の内容を省かず扱うことで 1 クールが長くなったことは、マイナスに働いていない。むしろ各課の内容を習得したうえで次の課に進んでいくので、学習内容の理解度は高くなり、学習者も安心して受講できている。8月クラスのレベルチェックインタビューで、4月クラスが昨年より長くなったことについての感想を聞いたが、全員が「長い方がいい。」「このほうがよくわかる」といった反応であった。

授業回数が 23 回から 36 回に増え期間も長くなったため離脱者が増えることを危惧していたが、幸いにも杞憂だった。4月クラスの授業開始前は途中で辞める学習者を想定し、1 クールを前半と後半に分け、定員に満たないクラスは後半からの受講を認めることにしていた。レベルチェックをして希望のクラスに入力があるかと認めた場合、途中参加ができるようにしたのである。キャンセル待ちも兼ねた処置だったが、結果的にあまり意味がないことがわかった。希望者の数がそれほど多くなかったこともあるが、クールの後半で授業に参加するのは、少しハードルが高いようだった。すでにクラスの雰囲気が出ていて、仲間になっている集団に途中から入るのはそれほど容易ではない。後半から参加したものの、最後まで続いた受講生は少なくなかった。そのため、この方式は 4 月クラス限りとした。

また、『いろいろ 初級2』の内容を消化した学習者が予想外に多く、次のレベル(初中級)の学習を望む受講生がかなりいることがわかり、文科省の求める B1 につながるクラスが開講可能であると判断できた。そこで、8月クラスに B1 を目指すクラスを設定することにした。4月クラスの三宮、初級 2 のクラスの受講生が継続して学習できるクラスである。なお、『いろいろ』は初級までの教材であるため、『まるごと 初中級』を使用することにした。そして、12月クラスは『まるごと 中級1』を学習するクラスを設けた。

授業では聴解を疎かにする傾向はなくなり、文字学習についていえば、かなの習得も改善されているとはいうものの、入門クラスだけでなく、初級クラスでも仮名の習得が不十分な受講生がいる。ただ、時間の関係で、漢字を扱うことができなかったという声が目立つ。また、レベルが上がるにしたがって、現行の 72 時間では不足がちになってくる。

7-2. 変更による成果

最後まで継続して学習する受講生が増加したことがまず挙げられる。昨年度に比べ、70%以上

の出席率の受講生が1割程度増えている。昨年度の8月クラスは36.6%だったのが、今年度の4月クラスは45%、8月クラスは48%となっているのである。明らかに、途中で辞めないで最後まで出席する受講生が増加している。

表-8 出席率70%の受講生の割合（昨年度8月クラスと今年度4月クラス、8月クラスの比較）

クール	拠点	出席率 70%以上
2023年度8月クラス	三宮、オンライン	36.6
2024年度4月クラス	三宮、オンライン	45
	新長田、御影	44.4
	合計	45
2024年度8月クラス	三宮、オンライン	48

10月クラスと12月クラスについてはまだ終了していないため、出席率を出すことはできないが、途中経過ながら、4月、8月クラスより出席は好調に見える。たとえば、10月クラスは残り1か月（授業8回）を残す時点（1月23日現在）で、出席率が58.3%あり、全36回に換算すると75%になる。これまでのクールごとの平均が50%そこそこであったのと比べると、格段の上昇率だと言える。当然、出席率70%以上の受講生がほとんどを占めることになると考えられる。残念ながら、12月クラスは10月クラスほど良好ではないと予想される。

また、以下の表で見ると、インタビューを受けた受講生で70%以上の出席率があった人の割合は、全体の割合（表8）よりかなり高くなっている。4月クラスの全受講生では45%だったのが、インタビューを受けた受講生では59.3%となり、8月クラスでは48%が73.7%にまで上昇している。

表-9 インタビューを受けた受講生で出席率70%以上の人

	インタビューを受けた人数	インタビューを受けて出席率70%以上の人	70%以上の割合（インタビューを受けた人に対する）
4月クラス	54	32	59.3
8月クラス	57	42	73.7

4月クラスはカリキュラムを変更し、インタビューを開始してから初めてのクラスであったため、受講生間にインタビューの持つ意味も、出席が大切であるということも十分に周知されていなかったようである。8月クラスになると、インタビューを受けたからには最後まで出席しようという意識が浸透してきたと考えられる。現在進行中の10月クラス、12月クラスはインタビューを受けた人が9割を超えていること（表7）から、さらにこの傾向は増すことが想像できる。

当面、数値化して考察できるのは出席率しかない。カリキュラムの変更、冊子の配布、授業内容の

統一などによって、学習内容の理解度や習得度が上昇したか否かは、インタビューや、授業に関するアンケートで見ることはできない。p5でも述べたが、レベルチェックインタビューで、継続学習者にルールが長くなったことを含めて、授業に対する感想を聞いている中では、全員が「長い方がいい」「よくわかるようになった」等の好意的な反応を示している。

また、4月クラス8月クラスの授業終了直前のアンケートでは、「勉強するのが本当に楽しかったです。」「先生もとてもやさしいしはじめなので、もっと日本の知識や日本語文化を学びたいです。」「いろいろの授業内容はとてもよく、外国人が日本の生活に適應するのに役に立ちます。」等の感想が書かれていた。そして、全員が日本語をもっと勉強したいと回答していた。

8. 問題点とその解決に向けて

8-1. 継続率のさらなる上昇に向けて

(1) レベルチェックインタビューの徹底

最後まで継続して学習する受講生を増やすためにレベルチェックインタビューを行ったことは大いに効果があったと言える。今後もインタビューを逃れる受講生を減らし、受講希望者全員のインタビューを実施するよう努めていかなければならない。現在、行っているインタビューの項目を見直し、より精緻なものにする必要もある。また、インタビューにおいては受講生のレベル判定を行うだけでなく、できるだけ日本語学習に対するニーズや要望も聞き取っていかうと考えている。

(2) 受講生との連絡を密にする

申し込みはしたものの全く出席していない受講生には、開講後2,3週間してから受講の意思確認のメールを送っている。これに何ら返信のない受講生も少なからずいるが、半数以上の受講生からは、「開講日がわからなかった」「帰国していて出席できなかった」「仕事が忙しくて受講は難しい」等のメールが返ってくる。こうした現実があるため、今後も開講後の確認のメールはしていかなければならない。今年度より、開講初日にクラスルールを渡し、欠席連絡は担当講師に直接言うか、それができない場合はKICCにメールするように伝えている。多くの受講生はルールに従って理由も含めて欠席の連絡をするようになったが、何の連絡もなく休む受講生もなくなってはいない。こうしたルールが徹底されるということは、出席するのが当然だという意識が浸透していくことでもあるので、ルールの説明が十分になされることを怠らないようにしたい。

(3) オンラインクラスに対する試み

対面クラスに比べて、オンラインクラスの出席率はどうしても芳しくない。オンラインクラスの受講生が継続して受講するための試みとして、1度対面で集まることをしてはどうかという考えがある。初日か開講してしばらくしてから対面で授業をするということをしてもいいのではないだろうか。あるいは、授業とは別にオンラインクラス向けのオフラインイベントを企画してもいい。今のところ案に過ぎないが、現実化できるよう考えていきたい。

8-2. 新設クラス

(1) 週1回クラスの開設

現実には、学習意欲があっても環境的に受講するのが難しい人たちが数多く存在する。仕事の都合、家庭の事情で、週2回、週3回教室に通うのが難しい人々である。そうした人たちを想定して、来年度から週1回のクラスを開設することにした。来年度は試行的に、土曜日の午前、入門クラスを新長田に設けてみる。週1回だとボランティア教室と同様のように考えられるかもしれないが、ボランティア教室でゼロ初級の受講生を受け入れているところはまだ少ない。また、1対1ではなく、集団で学習できるというのもボランティア教室とは異なる。

新たな試みとして、このクラスが軌道に乗るであろう後半(10月以降)には、授業にボランティアも参加してもらうことにしている。学習者とのやりとりにボランティアが加わることによって、受講生にレベル差があってもクラスとして成り立つと考えるためである。

この教室が軌道に乗れば、他のレベル(特に初級2を終えたB1につながるレベル)でもこうしたクラスを開設することを企図している。

(2) かな準備クラス

来年度より通常のクラスが開講する前に新長田でかなを学習するクラスを設ける予定である。これまで初級日本語クラスではひらがな、カタカナは自分で学習していることが前提で進めてきたが、中には初級クラスでも習得のおぼつかない受講生が存在する。授業内ではかなの手当てをする余裕はないため、いつまでも読めない、書けない状態をひきずっていることがある。こうした事態を少しでもなくすため、2回だけではあるが、開講前にひらがな、カタカナを学習するクラスを設定する。

8-3. 受講の有償化

これは、継続率の上昇とも大いに関係する問題である。現在、KICCの初級日本語クラスは完全に無償で行っている。無償であることが、安易な申し込みと、クール途中での離脱につながっていると考えられる。そこで、少額であっても有償にすれば改善されるという判断のもと、初級日本語クラスの受講料を徴収することが議論に上っている。ただ、その徴収方法が非常に煩雑になることが予想されるため、現在は棚上げ状態となっている。今後、より簡便な徴収方法が見つかれば、有償化は現実となる。

9. おわりに

以上、KICCの初級日本語クラスの現状とその問題点、改善の試みとしての様々な変更とその成果、さらには今後に残された問題点について述べた。2024年度に多くの変更を試み、ある程度の改善は見られたが、まだまだ途上にある。KICCでの日本語学習がさらに実効性のあるものとなり、日本語学習を必要としている人々に広く届けられるように、工夫を凝らした改善を進めていきたいと考えている。

こうした機会をいただき、これまでの実践の振り返りと今後の方向性を考えることができた。感謝いたします。

[参考文献]

CINGA 地域日本語実践研究会編, 2018, 『多文化共生の地域日本語教室をめざして——居場所づくりと参加型学習教材』松拍社

[神戸市:外国人の人口](#) 2025年1月28日アクセス

[国際交流基金 - 日本語教育通信 日本語教育ニュース無料で使える新教材『いんどり 生活の日本語』](#)磯村一弘・藤長かおる, 2021, 「日本語教育通信 日本語教育ニュース 無料で使える新教材『いんどり 生活の日本語』」国際交流基金

www.irodori.jpf.go.jp > teach 国際交流基金, 「いんどりの使い方」